オルガン・めだか・針穴写真

大学７期　山岡　元宏

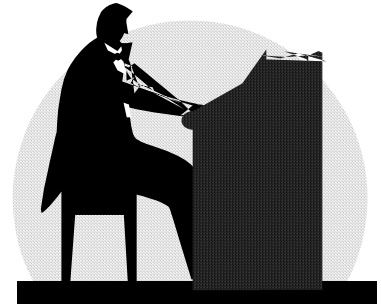
狭い部屋いっぱいに，三台の大きな足踏み式リードオルガンが並ぶ．明治時代後半生まれの石原オルガンは両袖にランプ台が付いていて，油汚れや焦げ跡がある．電灯の普及してない頃，石油ランプの灯りで，このオルガンを弾いていたのは，どんな人だったのだろう．

二番手の明治四十二年製のヤマハオルガンは当時の型録によると「六十一鍵，四個ストップ付き，定価金六十八円」とある．百年ちかく経っていても状態が良いので，良家で使われていたらしい．お金持ちのお嬢様が，海老茶か紫の袴姿で，オルガンに向っている様子を想像するのも楽しい．

最後の一台はヤマハ５型．教会で使っていたものの下取品をゆずり受けた．ヤマハの修理調律担当者は「この多機能の５型が欲しい，こんなに保存の良い5型は見たことがない」と言って撫でるような仕草をする．取扱説明書の正誤表には「日本楽器→ヤマハ」とある．この社名変更は 1987 年だから，この頃の製品である．

足踏み式リードオルガンは，すっかり姿を消してしまった．国内には，もはやメーカーは無く，いまや製造しているのは，イタリアに一社あるのみとか．でもそのオルガンはベニヤ板かハードボードの箱みたいで何の趣きもない．

オルガンというとエレクトーンやキーボードを思い浮かべる人が多く，足踏み式リードオルガンなど聞いたこともなく見たこともないとおっしゃる．

肝心の演奏の方は自学自習なので「みどりのそよ風」「牧場はみどり」などしか弾けなかったが，去年七月から毎日文化ホールの「弾いて楽しむオルガン教室」に通うことにした．先生ふたり，生徒八人で，隔週，自分の持ち歌ならぬ「持ち曲」を発表しなければならない．おかげで「サウンドオブミュージック」「フニクリフニクラ」など，いくつかの曲を楽しめるようになった．

東京の田口教育研究所は，メダカの産卵孵化時の酸素消費量を測定する実験を行っていた．この時に産まれた卵と仔魚を頒布するという新聞記事を見て早速申し込む．水の入ったビニール袋が宅急便で送られて来た．卵は見えるが仔魚は肉眼では視認できない．庭に置いてある祖父伝来の直径六十センチ，深さ三十センチの瀬戸物の金魚鉢に卵と仔魚を放り込んだ．卵は孵化しメダカは成長，次々と増殖し越冬し，翌春には泳ぎ出し，また殖える．水草（アナカリスか？）も繁茂し，卵をぶら下げたメダカは，藻にお腹を

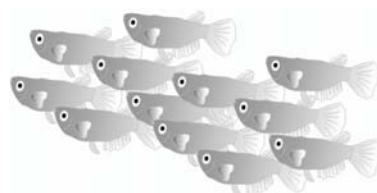
こすりつけ卵を産み落す．五年か六年の間に，陶器の飼育鉢は十三鉢になり，他にポリバケツ大小，プラスチックの漬物樽大小も援用．

梅雨まえにアナカリスは白い小さい四弁の花をたくさん水面上に，もたげて咲かせる．この花時がメダカの産卵期である．三月から十一月までの間，朝昼夕のメダカ一族への挨拶と餌やりを続けている．屋外飼育なので，ヒーター，ポンプや蛍光灯も不要，エサ代は年間四百円．

メダカを欲しいと言う人が居るが断る．冬に氷が張りそうだから，お湯を入れた，室内で飼ったが，夏に暑そうだから氷を入れてやったと言うからだ．なお朱色の緋メダカを店で売っているが，普通の黒いメダカと一緒にすると交雑して，朱と黒のモザイクが産まれるので注意しなければならない．

一昨年，日本針穴写眞協会（JPPS）が発足．初年度は入会金不要だし，針穴という響きに童心をくすぐられ入会．最初は靴を入れるボール紙の箱で針穴写眞機を作ることを教わり，撮影した写眞を共同展示．先輩・友人に見てもらい，励ましの云葉をいただく．東京でのワークショップにも毎回参加し，ブローニーのフィルムを使うカメラ，4 インチ×5 インチのカットフィルムを使うカメラを製作した．JPPS の中島正己さんの周到な準備と懇切な指導に感謝．東京目黒の自然教育園，大阪城公園や京都南禅寺の撮影会に参加した．針穴直径 0.23 ミリ，針穴を開けた銅箔は厚さ 0.01 ミリ．シャープな写眞が出來上るので，展示会に出したり，励ましをいただいた方々にお見せする．「よく写ってるけど，普通の写眞と何が違うんだ」とすごまれてタジタジ．針穴のベテランに相談すると「レンズが無くても，これだけ写るのが針穴写眞じゃ！と言うたれ」と．そのあと小声で「風にそよぐ樹木，動いてる人やモノを取り入れて靜と動を同時表現できれば」と言ってくれた．フィルムや現像・引伸に費用が掛かるが，出來上るまで，どんな写眞になるか判らないところが，デジカメなどでは得られない針穴写眞の醍醐味である．

昨年八月，東京の江東区文化センターで日本針穴写眞協会会員展が開かれた．大作？を四点出展したが，多くの知人・親戚が見に來てくれて，たいへんうれしかった．

ちなみに会員は全国で 380 名である．

足踏み式リードオルガン，メダカの飼育増殖，針穴写眞機による撮影は，くるま無し，携帯なし，パソコンなしの三無主義の筆者にはピッタリの遊びである．シヤケド，このような楽しみかたは，スローライフどころか，きわめて忙しい生活を迫られ，ビジイライフになる．まかり間違っても眞似をされないように切望する．

（おわり）

本稿は『ガリ版の灯を守る会』15 周年記念誌，『私，スロー人』，（2006 年 12 月発行）に採録されたものに，加筆改訂したものである．